

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17H00938

研究課題名(和文) モンゴル高原史の「空白期」の解明を目指した異分野融合研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary research aimed at elucidating the "blank period" of the history of Mongolian plateau

研究代表者

白石 典之 (Shiraishi, Noriyuki)

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：40262422

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 27,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、モンゴル高原に興亡した歴代遊牧王朝の中で、史料に名を留めても実態が不明であった鮮卑、柔然、第1突厥、阻トなどを「空白期」と位置づけ、考古学を中心にすえ、それに文献史学、気候学、生化学も参画した異分野協業チームで、モンゴル国ゴルバン・ドブ遺跡という多時期の墓葬遺跡の調査研究をおこなった。新たな考古学的所見とともに、ゲノム解析や食性分析で実証的データを提示できた点は大きな成果といえ、「空白期」の実態解明へ端緒を開くことに成功した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で対象とした「空白期」は、世界史で知られた欧州におけるゲルマン民族の大移動や中国における五胡十六国の動乱との濃密なつながりが指摘されている。本研究での成果は、こうした出来事が起こったプロセス解明への手掛かりになるものと期待できる。また、考古学を中核にし、文献史学、気候学、生化学も参画した異分野協業チームでの成功は、新たな学術領域の創出への展開を期待させる研究となった。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on the "blank period" of the past nomadic dynasties that rose and fell on the Mongolian plateau, such as the Xianbei, Rouran, 1st Turkic, and Tubu, which names were recorded in historical documents, but which actual situations were unknown. Aiming to elucidate the "blank period", we formed a team centered on archaeology, including history, paleoclimatology, and biochemistry, and field survey carried on the multi-temporal ruins of Gurvan Dov in Mongolia. We were able to present empirical data by genome analysis and dietary analysis, and to open the door to elucidating the actual situations of the "blank period."

研究分野：モンゴル考古学

キーワード：モンゴル遊牧王朝 モンゴル高原 考古学 古気候 ゲノム解析 鮮卑 柔然 阻ト

## 1．研究開始当初の背景

モンゴル高原に成立した遊牧王朝が世界の歴史に大きな影響を与えたことには異論がなからう。万里の長城を建造する契機となった匈奴、トルコ系民族勃興の契機となった突厥、ユーラシアの東西にまたがる版図を築いたモンゴル帝国などよく知られている。こうした王朝の興亡史に関しては、文献史料や考古資料が比較的多く存在していることから、研究が進められている。

しかし、同様に世界史でよく知られた出来事である欧州におけるゲルマン民族の大移動や中国における五胡十六国の動乱に関しては、モンゴル高原の遊牧民との濃密なつながりが指摘されているが、具体的な検討は多くなく、プロセスなどは判然としていない。こうした出来事が起こった、おおむね紀元1世紀後半～6世紀前半は、モンゴル高原史の「空白期」といっても過言ではないほど、その実態はよくわかっていない。

## 2．研究の目的

本研究では、この「空白期」にスポットを当てる。その当時のモンゴル高原には、鮮卑・丁零（高車）・柔然といった遊牧王朝もしくは遊牧集団が活躍した。そうした王朝や集団の出自系統、文化、自然環境との関係などから、「空白期」の実態を明らかにすることを目指す。

## 3．研究の方法

「空白期」は文献史料が少ないことから、物質資料を中心とし、遺跡出土品の分析や石碑銘文の読解など、フィールドワークが中心となる。研究代表者の先行調査で、「空白期」の遺跡として明らかになっているモンゴル国ヘンティー県ゴルバン・ドブ遺跡をおもな研究フィールドとする。モンゴル国のカウンターパートと共同で発掘をおこなう。そこから得られた人工・自然遺物の研究を、考古学を中心に据えながら、生化学、古気候学・文献史学の異分野研究者が融合して行なう実証的アプローチによる方法で調査研究をおこなう。その成果を踏まえて、「空白期」の実態を明らかにする。

## 4．研究成果

平成29(2017)年度には、9月にモンゴル国ヘンティー県のゴルバン・ドブ遺跡を、モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所と共同で実施した。ここには3基の円丘遺構があり、そのひとつ(1号マウンド)から本研究代表者の先行調査によって、鮮卑・柔然期に相当する1～5世紀の墓と、同じく空白期といえる第一突厥期(6世紀) 阻卜期(10～11世紀)の墓の計5基がみついている。当該年度は、1号マウンドからモンゴル帝国期直前の墓と、3号マウンドから阻卜期にあたる墓の2基を発掘した。墓の構造や遺物の分析を行ったのはもちろんだが、本研究の特色として、出土人骨のゲノム解析、食性分析、年代測定、出自系統を知るためのストロンチウム分析などの理化学的分析を行ったことがあげられる。現在データを鋭意解析中である。なお、第一突厥期の墓から水鳥の副葬が見ついている。これはモンゴル高原では初例である。その系統を明らかにすべく、中央アジア(今回はウズベキスタン)に資料を求める調査行を実施した。

その結果、出土資料や壁画資料の中に、水鳥副葬の解明に寄与するデータを見出すことができた。詳細は現在分析中である。そのほか、モンゴル国内で「空白期」に関連する遺跡の確認踏査を行い、アルタイ地域、オノン川地域、オルズ川地域で興味深い遺跡を発見した。今後の研究において調査地とする予定である。また、他科研との共同プロジェクトの成果としてゴビ砂漠において後漢代の匈奴遠征にかかる「燕然碑石」が発見された。これは漢と匈奴との攻防を具体的に伝える重大な発見である。今後の解読やさらなる新資料発見に期待が高まっている。当該年度は学会発表1編の成果が得られた。

平成30(2018)年度は、前年度に引き続き、モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所と共同で、モンゴル国ヘンティー県ゴルバン・ドブ遺跡の発掘をおこなった。当該年度は2号マウンドの発掘をおこない、4基の墓を発見した。1号墓はモンゴル帝国成立直前の12世紀、2号墓は10世紀の阻卜期、3号墓は13世紀のモンゴル帝国期、4号墓は6世紀後半から7世紀前半の第1突厥期というように、3号墓を除いて「空白期」の良好な資料を得ることに成功した。それを受けて、文献史料の精査、土壌堆積物の気候学的分析、人骨のゲノム解析などを現在進行させている。また、関連資料を求めて、中国新疆ウイグル自治区、カザフスタン共和国で当該期の遺跡の踏査をおこなった。新疆地区では北方の草原地帯で、カザフスタンではセミレチエ草原地帯で重点的に踏査を実施した。その結果、比較検討のために有益なデータを得た。資料は現在整理中である。

令和元(平成31、2019)年度は、引き続きモンゴル科学アカデミー考古学研究所と共同で、モンゴル国ヘンティー県ゴルバンドブ遺跡で、1号マウンドの発掘を行った。すでに1号マウンドからは6基の墓が見つかった。今年度は7号墓と8号墓を検出した。7号墓は第1突厥期の火葬墓で、きわめて珍しい発見である。8号墓は初期モンゴル帝国期の幼児墓で、ガラス玉などの副葬品に恵まれていた。試料の一部は日本に将来し、理化学的分析に付した。この発掘と並行して、ヘンティー県博物館とともに、突厥時代の石碑調査も行い、新たな石碑遺跡を発見した。成果は博物館と共同で発表する予定である。当該年度は金沢大学および淑徳大学にて、メンバーによる研究集会を開催し、研究の現状と問題点を整理した。また、最終成果のまとめ方についても議論した。当該年度の研究成果としては、研究発表2本、研究ノート1本がある。

令和2(2020)年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、予定していた現地調査を実施できなかった。そこで本研究のカウンターパートであるモンゴル科学アカデミー考古学研究所と成果の共有をはかるため、論文草稿の英文化作業を積極的におこない、『*Gurvan Dov 1 - Report on Japan-Mongolia joint archaeological expedition "New Century Project"*』という、「空白期」の多時代墓地として本科研で発掘を進めたゴルバン・ドブ遺跡の調査概要をまとめた報告書を、英語・日本語対訳で刊行した(部内刊行物)。残額は翌年度に繰越した。当該年度の業績には、論文1編、研究ノート1編がある。

令和3(2021)年度も新型コロナウイルス感染症の影響で現地調査ができなかった。そこで前年度からの繰越金を利用して科研研究員を雇用し、これまでに集積した考古資料の図化と、論文用の版下類の作成をおこなった。残額は翌年度に繰越した。

令和4(2022)年度は、モンゴルでの現地調査をおこなうことができた。5月にはモンゴル側カウンターパートの科学アカデミー考古学研究所が発掘した10~12世紀のエレーン・トルゴイ遺跡の人骨から、ゲノム解析用サンプルを採取した。これは「空白期」のひとつである阻ト時代の実態を知る上で、大変貴重な成果といえる。現在解析中である。また、8~9月の3週間、モンゴル帝国初期の遺跡であるアウラガ遺跡の発掘調査を実施した。1棟の住居跡を完掘し、阻ト時代からモンゴル帝国に至る文化変遷の解明に資する12世紀末~13世紀初頭の、史料の少ない「空白期」のデータの収集に成功した。そのほか、モンゴル側リーダーを務めるB.Tsogtbaatar博士が学振外国人研究者(長期)として7月に来日したので、本科研の最終報告をまとめる作業や、東京都立大学と日本モンゴル学会の協力を得ての成果発表をおこなったことも付記する。当該年度の成果としては、著書(単著)1編、著書(共著)1編、論文1編、研究発表6編がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>白石典之                                    | 4. 巻<br>33-1          |
| 2. 論文標題<br>モンゴル高原における遊牧の始まり                       | 5. 発行年<br>2023年       |
| 3. 雑誌名<br>沙漠研究                                    | 6. 最初と最後の頁<br>133-138 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.14976/jals.33.1_133 | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）             | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>白石典之, S. ウルジーバヤル, B. ツォグトバートル, G. ルフンデフ, L. イシツェレン | 4. 巻<br>51          |
| 2. 論文標題<br>ウグルグチン・ヘレム遺跡の石墓の構築年代をめぐる問題                        | 5. 発行年<br>2021年     |
| 3. 雑誌名<br>日本モンゴル学会紀要   | 6. 最初と最後の頁<br>65-72 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                                | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                        | 国際共著<br>該当する        |

|                                       |                      |
|---------------------------------------|----------------------|
| 1. 著者名<br>白石典之                        | 4. 巻<br>80-1         |
| 2. 論文標題<br>モンゴル帝国における「焼飯」祭祀           | 5. 発行年<br>2021年      |
| 3. 雑誌名<br>東洋史研究                       | 6. 最初と最後の頁<br>69-103 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし         | 査読の有無<br>有           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>-            |

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>L. イシツェレン, 白石典之                        |
| 2. 発表標題<br>モンゴル国における最古の鉄器文化～オブス県チャンドマニ遺跡1号墓の資料から～ |
| 3. 学会等名<br>日本モンゴル学会2022年度春季大会                     |
| 4. 発表年<br>2022年                                   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>白石典之  |
| 2. 発表標題<br>馬の肋骨を用いたチンギス・カン祭祀                               |
| 3. 学会等名<br>世界文化遺産ブルカン・カルドゥン山：研究・マネージメントの諸問題 国際シンポジウム（国際学会） |
| 4. 発表年<br>2022年  |

|                                     |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>白石典之                     |
| 2. 発表標題<br>遊牧を考える－過去・現在・未来－考古学から考える |
| 3. 学会等名<br>日本沙漠学会2022年秋季大会シンポジウム    |
| 4. 発表年<br>2022年                     |

|                                      |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>白石典之                      |
| 2. 発表標題<br>界壕遺跡からみたモンゴルと金の攻防         |
| 3. 学会等名<br>九州史学会2022年度大会シンポジウム（招待講演） |
| 4. 発表年<br>2022年                      |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>白石典之, 三宅俊彦, 笹田朋孝, G. Lkhundev, G. Batbold, B. Tsogtbaatar |
| 2. 発表標題<br>モンゴル国アウラガ遺跡における2022年度発掘調査の概要                              |
| 3. 学会等名<br>第22回北アジア調査研究報告会   |
| 4. 発表年<br>2023年  |

|                              |
|------------------------------|
| 1. 発表者名<br>白石典之              |
| 2. 発表標題<br>カラコルム都市圏における遊牧と定住 |
| 3. 学会等名<br>シルクロード学研究会 2023年冬 |
| 4. 発表年<br>2023年              |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>佐藤丈寛, 覚張隆史, 田嶋敦, Amgalantugs,Ts., Tsogtbaatar,B., Miyake,T., Shiraishi,N. |
| 2. 発表標題<br>モンゴル帝国期以前における東モンゴル遺跡出土人骨のゲノム解析  |
| 3. 学会等名<br>第74回日本人類学会大会  |
| 4. 発表年<br>2019年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>白石典之, 三宅俊彦, 覚張隆史, B.Tsogtbaatar, G.Batbold, Ts.Amgalantugs, E.Amarbold, L.Burentugs |
| 2. 発表標題<br>モンゴル国ゴルバンドブ遺跡1号マウンドの調査  |
| 3. 学会等名<br>第21回北アジア調査研究報告会   |
| 4. 発表年<br>2020年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>笹田朋孝, 木山克彦, L.イシツェレン, G.マルガドエルデネ, 白石典之 |
| 2. 発表標題<br>モンゴル国北東部オルズ川流域の21017年度踏査報告             |
| 3. 学会等名<br>第19回北アジア調査研究報告会                        |
| 4. 発表年<br>2018年                                   |

〔図書〕 計3件

|                                  |                 |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>諫早直人, 向井祐介, 白石典之ほか 8 名 | 4. 発行年<br>2023年 |
| 2. 出版社<br>臨川書店                   | 5. 総ページ数<br>312 |
| 3. 書名<br>馬・車馬・騎馬の考古学             |                 |

|                    |                 |
|--------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>白石典之     | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>同成社      | 5. 総ページ数<br>280 |
| 3. 書名<br>モンゴル考古学概説 |                 |

|                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>鈴木宏節ほか9名  | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>岩波書店      | 5. 総ページ数<br>311 |
| 3. 書名<br>岩波講座世界歴史06 |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                        | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                 | 備考 |
|-------|--|---------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 鈴木 宏節<br><br>(Suzuki Kousetsu)<br><br>(10609374) | 神戸女子大学・文学部・准教授<br><br><br><br>(34511) |    |



6. 研究組織（つづき）

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                         | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                           | 備考 |
|-------|---|---|----|
| 研究分担者 | 篠田 雅人<br><br>(Shinoda Masato)<br><br>(30211957)   | 名古屋大学・環境学研究科・教授<br><br><br><br>(13901)          |    |
| 研究分担者 | 覚張 隆史<br><br>(Gakuhari Takashi)<br><br>(70749530) | 金沢大学・古代文明・文化資源学研究センター・助教<br><br><br><br>(13301) |    |
| 研究分担者 | 三宅 俊彦<br><br>(Miyake Toshihiko)<br><br>(90424324) | 淑徳大学・人文学部・教授<br><br><br><br>(32501)             |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|         |         |